

野口小蘋

しょうひん

1847-1917



女性で初の帝室技芸員となり
明治から大正にかけて活躍した
南画家・小蘋。

「南画の女王」として世に残した
数々の作品は、気品に富んでいる。



《宜男富貴図》明治後期(部分)
宜男とは男子を多く産むことの意で、ユリ科の萱草(かんぞう)で象徴している。また、華やかさを意味する富貴は、牡丹で表現。花、蝶とも、細密に描かれているこの花鳥画は、小蘋が博物にも精通していたことを物語っている

持って生まれた 画家としての才能

野口小蘋は、1847(弘化4)年、大坂の難波に漢方医・松村春岱の長女として生まれた。幼少の頃から、詩書画に親しみ、山水でも人物でも見事に模写をするほど、その才能を発揮していた。

8歳の時から四条派の角鹿東山に絵の手ほどきを受けた小蘋は「玉山」と名乗り、後に父母と共に北陸を遊歴し、席画風の作品を制作している。1865(慶応元年、19歳になると、京都に居を構えていた関西西南画壇の重鎮・日根対山に師事。「小蘋」と号し、人物画をはじめ山水画・花鳥画などを描き続けた。

1871(明治4)年、25歳になった小蘋は、東京で本格的に画業に従事。この頃になると、画技に驚くほどの上達が見られ、1873(明治6)年には、皇后陛下御寝殿に花卉図8点を描くまでとなる。

酒造業「十一屋」野口家に嫁ぎ 甲府に住む

小蘋が甲府を訪れたのは、1875(明治8)年。甲府の豪商・大木家に寄宿しながら、絵を描き続けていた。そんな縁もあり1877(明治10)年、小蘋は31歳で大木家と親交の深い野口家の長男・正章と結婚する。野口家は、近江商人の家柄で

近江国蒲生郡蒲生町(現・滋賀県東近江市)に本家を置く酒造業「十一屋」を営み、江戸時代中期に甲府柳町(現・甲府市中央四丁目)に営業所と醸造工場を設け繁盛していた。小蘋は、「十一屋」の商標図案や贈答物の絵付けを手掛けるなど、商売にも携わっていた。しかし、夫・正



《西王母図》明治23年
西王母とは、中国で古くから信仰された女仙。小蘋の美人画の中でも代表的な作品

章が新しく手掛けたビール醸造業に失敗し、家督相続権を喪失。小蘋は一家で上京することとなる。

画学嘱託教授を命じられ、南画を教えることとなる。1904(明治37)年58歳の時には、日本を代表する美術家の象徴である帝室技芸員に女性で初めて任命され、皇族への御用品制作に頻繁に携わるなど多忙な日々を送るようになっていった。晩年には、大正天皇即位式の御大典奉祝画屏風として

「悠紀地方風俗歌屏風」を献上する榮譽を授かり、その作品は、近代日本風景画の代表作として位置づけられるとともに、小蘋の画業の集大成となった。

明治・大正期を代表する南画家として名をはせた小蘋は、1917(大正6)年、71歳で亡くなった。病の床に伏せてからも、周りが止めるのも聞かず、筆を握り続けたという小蘋。生涯貫いた画への真つぎな思いは、最後まで揺らぐことがなかった。

代表する南画家としての地位を揺るぎないものとしていった。

また、1889(明治22)年には、華族女学校(現・学習院女子中・高等科)の

代表する南画家としての地位を揺るぎないものとしていった。



《甲州御嶽図》明治26年(八百竹美術品店蔵)
小蘋山水画の代表作。甲府を離れた後も、たびたび昇仙峡に足を運んで描いたものと思われる

十一屋コレクションの名品展 ～野口柿邨をめぐる文人たち 会期:12月15日(土)～2月11日(月・祝)

小蘋の義父である野口正忠(号・柿邨)は、幕末明治期の「十一屋」野口家の当主で、画家の日根対山、富岡鉄斎ら多くの文人たちと交流があった文化人。このたび、県立美術館が十一屋コレクションの一括寄託を受けるにあたり、野口小蘋や富岡鉄斎をはじめ、代々大切に受け継がれてきた名品を紹介します。

- 休館日 12月28日(金)～1月1日(火)
月曜日(祝日の場合は翌日)
※12月25日(火)は開館
- 観覧料 一般1,000円 高校・大学生500円
小・中学生260円



県立美術館 甲府市貢川1-4-27
TEL 055-228-3322
十一屋コレクション 検索